

ボランティア精神の源を訪ねて……②
金刀比羅宮所蔵の「海難絵馬」

社団法人 日本水難救済会は、明治22年に大日本帝国水難救済会として創立してから120周年を迎えました。この記念すべき節目に、日本における水難救済の歴史をさまざまな角度から検証してまいります。

◆はじめに◆

金刀比羅宮所蔵の絵馬は海や船を題材としたものが多く、信仰資料として57点が重要有形民俗財に指定されています。そのうち約20点が、海難事故の様子を描いた「海難絵馬」と

呼ばれるものです。いずれも明治初期から昭和初期にかけて奉納されたもので、当時の海難事故の様子や、その特徴を知るうえで貴重な資料といえます。

写真(1) 明治2年奉納。左右に「金の御幣」



写真(2) 明治39年奉納。右上に「金の御幣」



◆「海難絵馬」について◆

「海難絵馬」の特徴を表すものとして、まず、その臨場感あふれる描写が挙げられます。「海難絵馬」は奉納者の実体験を再現したもので、荒れ狂う波に呑まれる船舶、必死の形相で一心不乱に祈り続ける遭難者など、遭難時の絶体絶命の緊迫感が伝わってきます。

また、ほぼすべての「海難絵馬」には、瑞雲に乗った「金の御幣」が描かれています。「金の御幣」は金刀比羅大神の御神霊の象徴で、上空に燦然と輝くその神々しい姿は、奉納者の、金刀比羅大神に対する畏敬と感謝の気持ちを表しています。

◆御神助の顕現◆

写真(3)は、誤って海中に転落した子どもを助ける家族と2羽のカラス天狗を描いた「海難絵馬」です。カラス天狗はこんぴらさんの“神使”といわれ、舟の両脇から家族の手助けをしています。そして上空には子どもの身を案じるかのように、やさしい光を発する「金の御幣」が描かれています。海上で遭難した時に“こんぴらさん”に祈れば必ず助かるという言い伝えがありますが、この絵馬は御神助の“顕現”が具体的に描かれた珍しい「海難絵馬」です。

◆異色の「海難絵馬」◆

「海難絵馬」の多くは海難当事者、もしくはその近親者が命を助けて戴いた御礼に奉納されたものです。しかし写真(4)は奉納者が救助船の船長という異色の「海難絵馬」です。絵馬の銘文には、“明治42年、横浜へ向けて航行中、高知県の足摺岬沖で遭難船を発見。遭難船の曳航を試みるが、大荒れのため断念。船員の救助にあたった”と記されています。

悪天候にもかかわらず遭難者を救

写真(3) カラス天狗が飛来する珍しい「海難絵馬」



写真(4) 明治42年奉納。「海難絵馬」ならぬ「救助絵馬」



助できたこと、そして自らも無事であったことに、奉納者はこんぴらさんの“御加護”を確信されたのでしょう。水難救済精神の萌芽を感じます。

◆おわりに◆

以上、当宮所蔵の「海難絵馬」について紹介させていただきました。

「海難絵馬」には、奉納者の金刀比羅大神への真摯な祈りが込められて

おります。

◆執筆者◆



金刀比羅宮 禰宜 琴陵 泰裕氏